

# 統

# 一



第百九十四號

祖書研究に就て

大僧正 本多日生師

生 死

文學博士 姉崎正治君

維摩經の異彩

加藤咄堂君

### 法華經に云く

其れ衆生ありて、佛の壽命の長遠なることは是の如くなるを聞いて、乃至能く一念の信解を生せば、所得の功德限量あること無けん。

### 日蓮聖人云く

法華經を信せざる人の前には釋迦牟尼佛入滅を取り此の經を信する者の前には滅後たりと雖ども佛在世なり。

## 祖書研究に就て

(日蓮主義青年會講演)

大僧正 本多日生師

今日は祖書研究に就てといふ演題で、暫らくお話し  
る考であります。此祖書研究に就ては、今日迄にお  
話致した事もあります。今日は少しく方面を變て述  
ようと思ふのであります。近來上人の人格又は主義に  
就て研究して見ようと云ふ様に、志を抱く人が漸次多  
くなりまして、或は上人の御遺文により、或は上人の  
傳記に辿ると云様に、其方法は必しも一定してゐませ  
んが、傳記に就て其人格主義を窺ふと云ふ方は、又別  
問題でありますから他日に譲る事と致しまして、今日  
は諸君が御遺文を研究せらるゝ上に於て、種々注意す  
べき事のある、其中の二三を擧て述て見ようと思ふの  
であります。

(1) 近來の思想と致しまして、研究上には是非部門分を  
する事が非常に流行するので、或人は哲學的に調べる

とか、或人は文學的方面より見るとか、又某の人は倫  
理道德の方面から眺めると云ふ様に、種々部門を分て  
研究に入る人が、益多くなる様であります。之は至極  
結構ではあるが、今世間で云ふ哲學或は文學なるもの  
を、日蓮主義の考より見ますれば、多くは偏頗なる思  
想であつて、上人の教を享るには或は其連鎖が切斷し  
て、無關係のものとなつては居ないかと思ふ、故に斯  
の如き分類的研究もよいが、更に其上に統一的研究を  
せらるゝ事が、極めて大切であらうと思ふのでありま  
す。譬へて見ますると、今日世間の學問でも、形而下  
として倫理學、心理學、物理、化學等と、澤山分類せ  
られて居ますが、更に其上には純正哲學と云ふ形而上  
の學問があつて、是を統括し其原理原則と云ふものを  
調ふるが如く、今上人の御遺文も哲學倫理宗教と各方  
面から分類的に研究するならば、其上更に統一的に研  
究する事を忘れてはならぬ、之は上人の主義の何れを  
見るにも必要なことで、上人の主義の統一點を心得て  
批判の最高標準と云ふものを捉へなかつたならば、縱

合哲學的に研究して見るも、又宗教的に調べて見るも、皆其根底は亡びて居る、斯るものは上人の主義に接近したと云ふ事は許さるゝも、眞に之を會得したといへない、故に苟も上人の主義に體達したといはれるには、何れの部門より入にしても、先以て其統一點を豫想して置ねばならぬ。

猶一層廣く申しますならば、上人の主義に限らず宇宙の眞理の研究にも、餘り分科的に研究する弊害があると思ふ、譬へば宗教といふものは感情性のものであるから、宗教は感情の満足を得れば夫でよいと云ふ様に、悉く西洋の思想に拘れた結果として、或特種の部分に陥つて了ふ缺點があると思ふ、昨年出された井上圓了博士の哲學新案を見ても、理性と信心との二に分ち吾人には推理的性能と、宗教を信する敬虔の念、即ち素直の心といふものがあつて、凡て偉大なるものには服従するといふ此二がある、故に宗教は理性に多少不服があつても、信心に於て満足が得らるれば夫でよいと云ふて居る、又或學者は文學は趣味を目的とするか

全く沈溺した時、始めて反省が出来ると思ふ、して見れば理性・信心等と區別せらるべき性質のものでない、只便宜上假に智情意の三つに區分するも、此三が集中せられる此に眞意義が存在するので、宗教の眞體も、文學の眞體も、倫理の眞體も、皆此に基いて居るのである、今日哲學・宗教・文學と種々雑多に分れて居るもの、其頂點に溯つて見れば、決して區分せらるべきものでない唯一のものであります、此處迄至らなければ文學としても、哲學としても、宗教としても、其價値は發揮しない、哲學者であるから宗教は信じないといふも、宗教家であるから哲學は必要であるといふのも、皆片輪であつて、眞の文明には哲學者たりとも宗教を信じ、又倫理學者たりとて文學の方面を重んずると云ふ様でなければならぬ、決して彼此分離すべき性質のものでないと思ふ。

日蓮上人は、人格としても、主義としても、智情意の三面が完全圓滿に發達せられたものであります、近來世の多の人に認めらるゝ處の上人は、其一部分一

ら感情を満足せしむれば夫でよい、又或者は繪畫が目的であるから、美其物が全ければ眞善の如き敢て關する處にあらすと云ふ様に、皆かゝる傾向を示して居る、其結果と致しまして自然主義であるとか、社會主義であるとか云ふ様な副産物は盛んに出て來るのであります、是は文學とか繪畫とか云ふものが、道徳或は哲學と關係を絶ち、哲學や宗教或は倫理と云ふものは、文學或は繪畫と没交渉なるものであるとする、分科的研究の餘波として現はれるものではあるまいかと想ふ、之は私の考であるが、少くとも上人の教義の影響を受け、法華經主義によつて作られたる精神ならば、決してかゝる事はあるまいと思ふ。

今吾人の心の状態を考へて見るに、理性・信心と云ふ様に、二者は確然區別せらるべきものではない、のみならず却つて是は融合せられ渾然一體となつて、之より發射し來るものが最も尊いものであると思ふ、簡單な話にしても千里眼婦人が、氣が散つては透視が出來ない、然るに一室に閉ぢ籠つて、種々の妄想を去り心が

部分で、或人は上人の意志の強かつた方面をのみ眺めて、知情の方面をば球かにし、又或者は感情の一方面を研究して、知識意志の方面を全く知らずに論ずると云ふ風で、悉く偏狹固陋の見方をするのが多い、之等は素より其人自らの偏曲せる事を證明せるもので、眞の信仰は知情意の三面に對し、平等に敬意を拂つて研究すべきものであらうと思ふ、此點に於ては私は昔の人の方が餘程よいと思ふ、斯の如くであるから上人は眞理上正しいとか、又或人は情愛が實に濃かであるとか、又或者は慈悲深いお方であつたと、各自勝手な方面から上人を渴仰し尊敬するが、之では如何に上人に敬服するも上人の全體を知り得たものでない、正直には相違ないが、要するに偏狹である、則ち主義に於ても無論正面に立ものは、宗教家としての上人であるから、宗教の眞體を提て立てたに相違ないが、さればとて哲學或は倫理の方面をも其中に包含せられて居る事を忘れてはならぬ、他の宗教に於ては或種のものに措て論じない遠慮を要するけれども、日蓮主義は何れ

の方面からでも大膽にやれるのでよろしい、然るに近  
 來の風潮につれて、日蓮上人の文學と云ふ題でも出す  
 と、大分氣がきいた様だからと云ふて、上人の文學の  
 一面を掲げ、或は上人の倫理の方面を見て、之は世間  
 の人が大切に思ふ事だからと著書等になつて出る、す  
 ると學生連も勢ひ夫に倣ふて、世間有るものものを持  
 來り上人の主義を研究する、大分氣がきいた様ではあ  
 るが、其實一部分を見たに過ぎないと云ふ弊害に陥つ  
 て居る事は確である、曾て傳教大師が俱舍法相宗のも  
 のを指して、彼等が法華經を研究するも、唯識者の心で  
 法華經を解釋し、又般若の如きは智慧を以て解釋する  
 から、却つて法華經を殺して了ふものであるといはれ  
 たが、今日上人を研究する一部の者も、亦確かに上人  
 の主義を研究して、而も之は殺して居る、之は私が常  
 に相憂とする處であるが、尙此事は上人が生命として  
 尊ばれた法華經に依て考察する必要がある、法華經は  
 哲學の方面も倫理の方面も、其他有ゆる思想をも含蓋  
 し、殆ど其頂點に達せるもので、決して今日の哲學と

一如の妙致を認められて居る、されば精神的關係を客  
 觀的に分ち居る間は、此頂點に達する事の出来ない事  
 は明かである、更に又之を倫理の方面から考へれば、  
 世間の倫理は只人と人との關係を説く、所謂相對上の  
 事であるが、此の如き道德觀は上人には何等の關係も  
 ない、上人の認められた道德は人と人との問題を云ふ  
 にも、常に絶對格上の話で、決して世間で云ふ様な、  
 一時的瞬間のものでなく、永久不滅の絶對性あるもの  
 をして見る處より論せらるゝのであります、故に世間  
 で普通云ふ様な道德として見れば、上人の神髓には少  
 しも觸れて居ない、上人は世間相對的のものに佛性あ  
 りとせらるゝので、此佛性と云ふ事は既に絶對性を認  
 められた事で、要するに倫理の基礎道德の本源であり  
 ます、今一つは佛に對する信念が溢れて社會の光明  
 ともなり、倫理道德をも構成して居るので、上人の立正  
 安國の立正は絶對格より云ふので、普通ありふれの人  
 道徳教でなく、正法を立て、根本的に國家を安穩にし  
 太平を謳歌せしめんと、深慮より出たる金句である

いふ様な冷なものでもなく、宗教の神髓と接觸して居  
 る、宗教の眞生命とも稱すべきものであらうと思ふ、  
 若之が普通の哲學の様なものならば、腦は透明になる  
 も難有と云ふ者は少しも起らないが、法華經は研究し  
 て眞に難有なれば難有なるほど、益明になるので、  
 之を法華三昧とも稱するのであります、然るに佛教中  
 でも觀念系にあるものに、研究すればする程、冷にな  
 つて難有味が失せる、又是と反對に難有事のみ考へた  
 淨土門であるとか、眞言の様な宗旨になると、一も二  
 も無く難有がつて、明晰な考は少しも起らない、又彌  
 陀とか大日とかの如き、只縁あるものを信するといふ  
 ならば、夫は野合的の信仰とも名くべきもので、極め  
 て幼稚なるものと云はねばならぬ、然るに法華經は、  
 眞理上の思想としても最も進歩したるもので、其頂點  
 に達し、澄澗たる信念は此に合して居るので、上人は  
 是を開發せられて吾人に示されたのである、則ち宇宙  
 觀に於ては十如實相の法門は建設的のもので、佛の難  
 有いと云ふ事を十如より説き起し、遂に人法一體生佛

之が又眞の法華經主義で、不輕品等を讀んで見ても、決  
 して未來觀に捕はれて居ない、さりとて現世を輕視し  
 ない、人は皆各佛になる絶對性がある、故に人を尊  
 敬すると云ふ様に、倫理の根本に立て居るのでありま  
 す、然るに今日多くは法華經及び上人の此絶對主義を  
 知らず、相對的に小道德觀より其主義を眺めて居もの  
 が、十中の八九ではあるまいかと思ふ、是の如くあから  
 さまに云へば、上人を信仰する人も極めて少くなり、  
 且又斯様な人々でも其中には氣付で居らうと思つて、  
 今日迄は餘り申しませなんだが、本會は綜合其人は少  
 くとも、模範的に上人を研究せんとするものゝ、會合  
 所であると信じますから、實際の處を打明す次第であ  
 ります、又國家の上に倫理が尊いと云ふのも、絶對の  
 道と合體する上に於て眞に尊い價值があるので、只神  
 秘的に考へて我日本が萬世一系であるとか皇統連綿で  
 あるとかいふて、直ちに靈土なりと妄信するのでなく  
 日本としての光明を認め、此靈土は絶對無限の正法の  
 合體して進む國である、故に靈徳があると教へられた

のであります、故に世間並の倫理道德の眼光を以て、上人を解釋せんとすれば、全然分らない事になるのであります。

更に文學の方面から申しますれば、文學に於ては元より趣味は大切に相違ありませんが、健全なる文學は同時に人を向上せしめねばならぬ、文學に耽つたが爲に墮落し悦が減じて、闇黒裏に向ふと云ふ様な向下的のものならば、夫は眞の文學でない、讀んで喜びも増し、漸次崇高の念に導かれ、人格を高尚にする處に於て、始めて文學としての眞價は存するのである。之が主眼とする處で、佛教に置ましては娛樂と信仰と云ふ事は古くから現はれて居るので、其樂により遂に罪に陥る様なものは、本より罪として許さない、娛樂の中にあつて漸次向上するのであるから、第一には佛を莊嚴し、音樂をも奏し、此に崇高の念を養ひ、人をして善道に導く、夫を推し究むれば、趣味の頂點には絶對のものが常にましますのである、松野抄の中に、瑠璃を以て地とし、金の繩を以て八の道を界へり、

明智に従ふ」といふ事がありますが、之は悦びつゝ愈益、明い方に行くこと云ふ事で、吾人も亦歡樂を盡しつゝ向上する教でなくてはならぬ、そこで日蓮上人の御遺文に就ては、身延山御書の如き、最もよく此娛樂と信仰との調和が示されてゐるので、誠に身延山の栢はちはやふる神もめぐみをたれ、天下りましますならん」と無限の法悦と、絶對無上の實在觀念とが接合せられて居のであります、又「たちわたるみのうき雲もはれぬべし、たえのみのりのわしのやまかせ」と詠せられたるが如き、決して浮薄なる情や、輕卒な心から出たものでない、されば世の淺學者流等に到底上人の文學は解せらるゝものでありません、宗教的法悦と無限の靈光とに打るゝ、其處に眞の文學があるので、曾て上人が佐渡塚原三味堂の中に、雪を食としてあらせられながら、劫初より以來、父母主君等の御勸氣を蒙り遠國の島に流罪せられし人々、我等が如く悦身に餘りたるものよもあらじ」と仰せられたるが如き、世間の人から之を見れば、逆も其意味は玩味せられない、宗教

天より四種の花ふり、虚空に音樂聞へて、諸佛菩薩は常樂我淨の風にそよめき、娛樂快樂し給ふぞや、我等も其數に列なりて遊戯し樂むべき事はや近づけり。

とありますが、吾人は之を要求せねばならぬ、花を見て歸途に喧嘩をする、或は花見の爲に惡事をなすと云ふ様な事では、夫は眞の樂でない、故に世間の文學はいさしらず、法華經には序分に四華六瑞と云ふ事が説てあつて、天よりは四種の花ふり、空中には音樂が聞え、地は六種に震動すると云ふ様に、自然に心持がよくなつて来る、のみならず之と同時に向上するので、諸の天女が鼓を撃て微妙の音樂を奏する反面には、釋尊が無上の大法を説きつゝ、あらせられるので、娛樂と信仰との調和と云ふものが、極めてよく説き示されてゐるのであります、尙此娛樂と信仰との關係に就ては、樂瓔珞莊嚴經、譯して順權方便經と申しますが、此中に文學的趣味と信仰との調和せられてゐる事が、能く窺ひ得らるゝのであります、其中に「歡悅を以て

の靈光に打れて後始めて味ひ得らるゝもので此點迄徹底しない人であつたならば、縱令情の日蓮上人とか、或は日蓮上人の文學觀等と題して一寸氣がきいた様ではあるが、世間並の文字、世間並の倫理觀と同一視して居ので、上人を全く解する事は出来ない、丁度曆が一日誤ると一年三百六十五日に間違を生ずると同じであります。

又宗教と云ふ方面から云へば、宗教を信するも随分如何はしいものが多い、元來宗教といへば信仰教義である、然るに教義に入るや、天台ではドウ、日蓮上人はコウ、本門と迹門とは何處が違ふと、各人各異の論をして信仰と云ふものが一も起らないが、日蓮上人の建設せられた教義はそんな斷片的のものでなく、整然として統一せられて居る一大教義である、縱令ば一念三千と云へば、其中に於て宇宙觀も人身觀も佛陀觀も悉く窺はれ得るのである、然るに教義として一念三千を研究する時、其結論は何處に行かといふに、多くは十界互具百界千如迄位行と、三千がどう十如がどう

と、只其文字の中に没頭して了ふものが、十中の八九であるが、眞の教義はそんなものでない、一念三千の上に透明なる判断せられた眞理を見、其結晶せる光明に接しなくてはならぬ、只筋が五本だとか十本だとか云ふて、夫が満足に引れば試験が通過したと考へてはならぬ、又人身觀よりするも、阿佛房さながら寶塔の一句を語了し、吾人は一念三千の當體で、即佛である、と頭から妄信して、我身が如何なる光を發するものやら、又貧乏したり腹が立のは何やら少しも分らないものもあるが、上人の人身觀は決してそんなもので無く能く纏め來つて明白に示されて居つて、其教義の道行が何處に行か分らない様なものでない、一代佛敎を纏め來るも、實に快刀で亂麻を斷つが如く、明かに分るのであります、一念三千に就て、宇宙觀或は人世觀を見るも、決して誤るべきものでない、教義の妙處に達し、其義理に到達したならば、必らず纏れた光明ある信仰を得べき筈である、然るに十界互具生佛一如、或は入我我入等と、一部の研究に捕はれるから、上人

ます、又人身觀上に於ても、吾人は佛の愛子であるといふ、此自覺を生じない様なものは、所謂狂子である、不幸の子であるが、心遂に醒悟して此光明に接觸する、之が眞の人身觀である、決して入我我入とか只煩惱即菩提或は十界互具等と、冷に説き去らず、吾人は無始の古より佛の愛子として、永久の大關係を有するものなる事を説くから、生佛の間には常に温かき血液が通ふてゐるのであります、實に幾千萬年を経るも棄る事ない大關係を結べるものは、唯有一人の佛陀でありませ、朋友の如き一時如何に睦しく交際するとも、星遷り物變れば其關係も全く分らなくなるが、佛陀より發射し給ふ永久不滅の光は、縱令地の下木の根岩の中迄も來つて、最後は成佛せしめずんば止まない故に全體の中心として常に法を説き、過去無量劫より未來は何千萬年の後迄も、毎自作是念の大慈悲の光は未だ曾て暫らくも廢せず、常恒不斷に發し給ふのである、之は眞理上から人格實在と道理上論證する一念三千の結論であります、今日宗教として上人の主義を研

の信仰に大なる距離を生じ、理性と信仰との一致を缺き、一ツも纏れる信仰を得る事が出来ないものであります、佛陀觀より見るも、十界の當體即佛なりとし、全體を一大圓佛なりと見、生佛不二で、山川草木當體即妙と卓越し、一念三千は其結末が何處に達して居るやら、門内の人にも知つて居るものが乏しい、かゝる事であつたならば、宗教として上人の教義を研究しても徒勞に歸し、到底其眞面目に達する事は出来ない、折角の努力も不成功に終るのであります。

上人が宇宙的に一念三千を見らるゝ場合には、明かに迷悟の實在であつて、佛は如何なる時も休まず敎の光を發射し給ひ、吾人は本然の性としては佛性を有するも、現實に於て迷へるものである、が併し兩者は父子の關係で、丁度草木が太陽に向つて生成發育するが如く、吾人は佛陀に向ひ始めて向上する事を得るのである、之が變體であると背合せとなるのであります、此の如くして向上するのが宇宙の實相でありまして、之を眞理の基礎の上に立て認められたのが上人であり究する者が多いにも係はらず、此妙處に觸るゝものが極めて少いのは遺憾であります、本尊抄には我教は信じ難い、若容易に信せらるれば夫は正法でないといふと仰せられたが、眞に敬虔の態度を以て渴仰する、此に始めて、味識し得べきであつて、上人を渴仰し上人の人格主義を研究せんとする者は、深く味ふべきお言葉であると信じます。

更に又信仰上より考へて見るに、皆研究の方に馳せて、四信五品抄には、現在の四信の初の一念佛解と、滅後五品の第一の初隨喜と、此二處は一同に百界千如一念三千の寶篋、十方三世諸佛出生の門なりとあるから、信念が肝要で觀念はいらぬとか、只理論に馳せて偉大なる力をあらはす佛と云ふものが如何なるものやら分らない、之では信念の意味が全く消えて了ふが、さうでなく生ける信仰の解釋を本當に傳へねばならぬ、只文字章句のみに拘泥して可否を論じた處で、夫が何等意味あるわけのものでもない、宗教の信念と云ふものは、譬へて見ると麴が醱酵して具合よく米の精力が

現はれて、白く養え上つて居る様な状態をいふのである、只、冷に黒文字としてあるのみでなく、文字章句悉く醗酵して居る、之が信念であり、上人を眞に學ぶべきは此處である、法華經に於ても、以何令衆生の御文は單純の文字でない、如來無限の大慈悲の醗酵したもので、斯かる信念は四信五品抄或は得受抄の文相を百遍讀も夫で會得せらるゝものでない、本尊抄に至て初に十界互具を冷靜に書き現はされ、愈信仰の妙處を現はさるゝに至つては、私に會通を加ふれば本文を穢すが如し、然りと雖も文の心は釋尊の因行果徳の二法は悉く妙法蓮華經の五字に具足す、我等此五字を受持すれば自然に彼の因果の功徳を讀み與へ給ふなり、と熱烈を極め、眞の信念は最善の甘露門たる妙法蓮華經に於て始めて成し得るものであると、溼潤たる信念は無限の力を込めて云ひ現はされて居る、天晴ぬれば地明かなり、法華を知るものは世法を得べきかと佛の大慈悲を眞心より感じてお書になつて居る、がゝる事は只文字章句の義論より出るものでなく、知

も必要であると思ふ、單に冷な文章や教義を注入的に頭に入れるから弊害百出するのであるが、眞に全意識を活躍せしめて研究したならば、三年かゝるものは半年、半年かゝるものは一月で其効果は却つて倍するものである、開目抄であれ、本尊抄であれ、如説修行抄であれ、此意味で研究せられたならば、百遍讀むものは唯一遍で、其眞意は了解せられるものであらうと信じます、是を私は統一的研究と名けるので、今日では哲學でも文學でも、或は其他凡ての學問が餘り分科的になり過る結果、冷なものとなつて了ふと思ふ、兎に角何れの部門より入て研究するも、終局は此統一點に達せねばなりません、言葉を換へて申すならば、知情意三面の共同作用を要求すると云ふ事は、其人全分の力を込めてやると云ふ事で、之は單に學問或は宗教の研究に於てのみでなく、何事を研究するに就ても同じである、譬へば擊劍一つやるにしても、全分の力を込め身に汗を流して、之を一度ならず二度三度乃至數百千遍繰返して、始めて免許せらるゝのである、故に日

情意の三面を調和し渾然一體となり、更に其頂上に立て進られたものである、世の上人を學ぶ人々は、宜敷此醗酵したる處の一大信念を得ねばならぬ、徒らに啓蒙や健抄を引出して見た處で何の功もあるものでない智情意の三が能く纏つて信念が充實した時一讀したならば、本佛の靈光は直ちに我心下に下り、無限の實感に打れるに相違ありません、上人の主義の研究も結局此迄到達せねばならぬ。

併しながらかゝる研究は、何人にも行ひ得ると云ふ事は難いといふかは知りませんが、併し物は考へ様で人には夫相當の智識もあれば、感情もある、意志もある事故、其全意識を働かして着實に研究したならば、決して出来ない事はない、之には私は禪宗で只解釋丈はいくら立派に出来ても、更に三十棒をくらはし、眞に會得せしや否やを實際に確かめるのは、至極結構であると思ふ、今日の學校でもそうであるが、只筋書ばかり完全に出て来たからとて、夫で及第させるといふのは甚だ不覺な話で、點數及第は廢し、三十棒式の採用蓮主義を研究するにも、常に全分の力を込めてやらねばなりませんが、是の如くして研究したならば、其會得する處は小分であつても、必ず小日蓮となつて現はれ出づべきものである、若夫が研究はして見たが現はれないと云ふならば、何れかに缺點がある事を證據立て居るものと思ひます、或人は學生は初から先疑問に入るに定つて居ると、豫め相場を定めて居る人もあるが夫は甚だよくないことで、日蓮主義も導き方に依つて、勞力も少く時間も費さずして、然も纏つた研究が出来たらうと信じまして、今日は平素考の有の儘を述べた次第であります。(完)

## 生 死

(明治四十四年二月十二日天晴會講演)

文學博士 姉崎正治君

孔子が季路の問ひに答へて、未だ生を知らず、焉ぞ死を知らんと云はれた言葉は、往々世間には、生死問題を疎外する言分に使はれて居る、然し孔子の眞精神は、全く生と死との問題を棄てるのではなくて、事に先後あるを指されたものと思ふ、孔子の意見は如何であつたにしても、我々はそれに拘泥する要はない、我々からいへば、どこまでも、生を知らないものは未だ死を知らないものであると同時に、死を知らなければ、生も亦知り得ないといひたい。此は生死の無常迅速で人の世に憂が多いからといふ悲哀の精神からいふのでなく、この二つが人生の大事であるから、この大事の消息について覺悟なしには、人生は只一時の事、現實ばかりとなつて、精神の落ち着きにも大きな影響を及ぼすがためである、明日の事は思はないで今日の日を暮らすものは、所謂今日暮らし、醉生夢死の徒である

愚人である。然るに世には自分の一生についてこの様な愚人の多いのは、つまり死を怖れるといふ事が、只この生命の終りを惜むといふ私利我慾から出るためにその心の明を味まされ、そこで死後については何かの妄想を作つて自ら慰めて見などしても、過去生前について終に自ら省みるの眼が開けないのである。人としてこの生を愛しないものはない、然し此の様な我慾に味まされた愛惜心で生を愛するがために、この生を樂くするために不義をし。死すべき場合に死ぬ事をも忘れ、多くの場合に一文惜みの百知らずになり、この生命を愛して、而かもその眞價を知らずに済む。何れの現在でも過去と未來との關係しないものはない。今日の自分の財布は昨日の勤惰の結果を示し、今日の行ひは又明日の幸不幸を生み出す。人間が現に享けて居る生は、無限な時間の一瞬時でないか。その一刹那の命を思ひ、泡沫の現在のみを執着するために、僅に死後の事をくよくよする位が關の山であつて、無限の過去を思はないのは、何たる小量見であるか。現在は三

る、昨日からの我れの續きを考へなければ、今日の我れは無主義無定見の現在のみとならう。宗密の原人論にもいつてある「萬靈蠢々皆その本あり、萬物芸々各その根に歸す。未だ根本なくして枝末あるものならず況や三才の中の最も靈なるものにして本源ならんや我れ今人身を禀け得て、而かも自ら従つて來る所を知らざれば曷ぞ能く他世の趣く所を知らんや。曷ぞ能く天下古今の人事を知らんや」といふのはこの事である、然るに不思議な事には、世の中には、死を怖れて死後の心配をする人はあるが、生前の我れについて考へる人は極めて少い、生まれて後今日まで何年かの生活をして來たのも過去であり、この過去が自分の現在なり將來に大切な關係があるならば、生まれる前の過去には我れのつゞきはなかつたとして棄て、おいてもよからうか、明日の計をなすものは、昨日の事をも併せ考へる要があるならば、何故に將來と共に過去をも死後と共に生前をも考へないか。あすは食ふ物がなないと心配しながら、さのみ怖れて居た事を省みないのは

世の一點、無限の過去と無涯の未來との境目である、この現在に萬劫に亘つて大切な一刹那である。然しその大切な所以は只現在を現在とするためではなくて、それが過去と未來との分け目、この分け目に無始の過去をも又無終の未來をも收め盡し得るからである。現生の問題は直に生前死後に連り、三世を併せて見なければ、この一刹那の意義すら明かにする事は出来ない。現在の事を憂へながら死後を思はず、生を知らないからといつて死を思はないのも愚であれば、又死後を考へながら生前を思はないのも短見である、ドイツの哲學者シヨペンハウエルがかういふ事をいつて居る。「一例をいへば、人は少し前に無から生じ、従つて無始以來無であつたが、而かも未來には不滅を得やうと教へる如きは、又人は徹頭徹尾他人に作られたものであるが、而かも自分の行動怠慢に對しては永久責任を負はなければならぬと教へると同じ事である。即ちその様に教へ込まれて、それから精神が成熟した後に、反省熟慮して見て、その様な教へは到底保たないと



なつてくれれば、そこになつてそれよりも良い代はりを得る事も出来ず、又それを理會する事は尙更出来ず、そのために恩藉を失ひ、天然が死のかわりに與へておいた恩藉(不滅の信仰)を得る事も出来ない様になるこの様な開展の始末からして現今(一八四四年)イギリスでは墮落した労働者は社會黨として、ドイツでは墮落した學生が新ヘーゲル派(物質論者)となつて、絶對に形而下の見解に陥り、その結果「食へ、飲め、死んで後には樂みも何もあるものか」といふ風になり、つまり獸類主義といふべきものになつて居る。(意志と現識としての世界、下巻)。此は七十年前の言葉であるが、今その廻はり合せは、日本にも來て居るではないか。墮落した學生の自然主義、現實主義、半獸主義、それから終には墮落不平家の無政府黨など、その緣となる社會の事情は色々あるにしても、依つて來る所は生死の問題を明ならめなために、現在この生命の意義をも知り得ないといふ一事に歸着す。

然し此く云へばとて、我々は何事をも棄て、明けて

新學に基いて過去未來を思はなければ、三世は空理たるに過ぎぬ。醉生夢死の現實主義と、空理空論の思辨冥想とは、共に人生の賊で真理の光りを蔽ふ雲霧である。

それ故、我々は空理に走つてはならぬ。生前の過去無限に對するにも直に現在に接し、死後の未來久遠を思ふにも切にこの生に結び附けなければならぬ。而してこの理をも我々は空論として談じない。我々の眼前にこの三世關聯の好消息を一生の行動と自覺とに現はし、此の生死の一大事につけて活きた教訓を垂れた大聖が居ますではないか。今月十六日は月日の呼名の上で、日蓮上人が六百八十九年前に東海の濱に生まれまじし日である。日蓮は凡夫なればと仰せられた通り、父母もお在りになつた。而かもその父は旃陀羅だとさへ堂々と告げて居られる。その誕生の時には如何に奇瑞があつたとはいへ、凡夫で旃陀羅の子、肉もあれば血もあり、その肉は東條の小松原には血を流し、佐波の雪の中には寒さに凍りもした。今夜の寒さにつけて

も暮れても、生まれる前死んだ後を考へよといふのではない、此の如きは却て色々の憂惱煩悶を増す所以で生前死後について、空想で如何に考へても、何等の真相に達するものでもなく、如何に考へても、只考へるのみでは人生について何等の光明をも齎らさない、過去は已に過ぎ去つたいくら追ふても復歸つては來ない未來は未だ來ない。いくらあせつても來る時を待つ外ない。それを空に考へ空に想ふのはやはり迷ひの種である。佛陀の教訓にも、

慎むて過去を念ふ勿れ

過去の事は已に滅す

現在所有の法をば

然し此は單に現在に甘んじ、現實以外に思ひを馳せるなといふ意味でなく、現在の修養切實の道行を棄て、徒らに過去を思ひ、妄執から未來を願ふなどの意である、先に云つた如く、現在は無始無終の大時間の

一瞬、過去と未來との境目、これを思はなければ、現在は無意義であるが、而かも現在に就いて切實直接の

亦未來を願ふ勿れ  
未來復未だ至らず

人は當に思ひとなすべし

も「弟子等の身を想ひ、深山の白雪の中には、一夜は寒苦鳥に異ならず」「すでに讀經の聲も絶え觀念の心もうすし」の有様で、その身も心も、木でも金でもなかつた。父母を思ひ、弟子檀那を思ふばかりでなく、國を思ひ法を思ふては「鳴かねども涙ひまなし」の人間であつた。人間であつた何よりの證據には貞應元年二月十六日(陽曆三月三十日)午の刻の誕生から弘安五年十月十三日(陽曆十一月十四日)辰の刻の入滅までの一生は決して影でなく、血あり涙あり、又精神自覺の發達には明白に人間としての經歷を示された。

いかに況や、日蓮今生には貧窮下賤の者と生まれ、旃陀羅が家より出でたり。心にこそすこし法華經を信じたる様なれども、身は人身に似て畜身也。魚鳥を混丸して赤白二諦とせり。その中には識神を宿とす。濁水に月のうつれるが如し。糞囊に黄金を包めるなるべし。

(文永九年、佐渡御書、御遺文八〇三頁)

然るにこの肉身托生の人は、又自ら任ずるに日本國

の柱、日本國の眼目、日本國の大船を以てし、過去の上行、不輕の再生、末法の大導師として未來萬年の人生救済は自己一人の慈悲に係つて存すと信せられた。「本覺のうつゝに返りて見れば、この身が三身即一の佛」とは、實にその人の一生に實證悟達せられた大真理であつた。さればこそ最後隱棲の身延の山中にもこの覺悟は愈々益々明白に又熱烈に現はれて来た。

此處は人倫を離れたる山中也。東西南北を去りて里もなし。かゝるいと心細き幽窟なれども、教主釋尊の一大事の秘法を靈鷲山にして相傳し、日蓮が肉團の胸中に秘して隠し持てり。されば日蓮が胸の間は諸佛入定の處也。舌の上は轉法輪の處、喉は誕生の處、口中は正覺の樹なるべし。かゝる不思議なる法華經の行者の住處なれば、いかでか靈山淨土に劣るべき法妙なるが故に人貴し、人貴きが故に處尊しと申すは是れなり。

(弘安四年、南條七郎殿御返事、御遺文二〇六頁)

賜ひし一大事因縁から發足して、唯我一人能爲救護の妙用を宣布したもの。而して其が救護の度主、世間一切人天の父は、やはり一方に於ては悉達太子として人身を受け、釋氏の間から出て、伽耶城を去る事遠からざる所で、道樹の下で正覺を成就せられた、現前人間の佛陀である。而かもこの人身始覺(正覺)に入つた始めの時である)の佛陀は、又同書に他方では、無量劫以來久遠の佛、本覺(本來の正覺)を位として、時間を超絶した)の如來である。始覺と本覺と、覺の始めあると始がないのと、この二つが一人の人格に具はつてゐるなど、一見すれば一と二とを合せて一だといふ不合理、矛盾だとも見えやう。今はこの不合理を説明すべき機會でない、二二ヶ四とは知つても、何故と知らな

參照(文永十年、内證佛法血脈、御遺文九一九—九二〇頁)

一方は父母所生の人身、一方は三世諸佛と久遠の壽命を共にする佛性、この二つが全く一人の人間に事實となつた。かゝる不思議なる法華經の行者の一言は實にこの大神祕の奧を盡し得て居る。故如何となれば上人の此自覺は、決して理論の哲學からも出ず、空理の悟り得たものでもなく、まして根據もない迷信や自負では尙更なく、第一には法華經に對する純信熱誠から出て、而してその所説を一々に身に試めしめて見、一生に行ひ、獨り十如是一念三千の觀法ばかりでなく、末法弘通の大事を躬親らに行ひ、所謂の身證色證によつて湧き來つた大覺悟であつたのである。上人の一生が若く法華經の色證であつた事は、今一々之を述べる餘裕がないが、極めて概括して云つても、證據歴々驚かされるばかりで、キリストが古來の豫言に對する身證も之には及ばないかの如く見える。法華經とは何の經か。一言にして盡せば、世尊如來が人の世に出で生死、八十入滅の色身に直に久遠無限の不滅を現じ、云はゞ年齢二十五の人が、百歳の子を持つて居る事を證言せられた消息に、沈思して見なければならぬ。否、只に沈思して思索するのでなく、直にその勅命に従つて、その命令通りに行ひ、その教示通りに信行受持しなければならぬ。かく信じ、かく思ひきつたこそ時の不祥、此から以後、上人の一生は實に迫害の一生、多難怨嫉の間に僅かにその身を保ち、而かもその信は愈よ堅く、その獅子吼は益す大に、虎嘯けば大風吹き、龍吟すれば雲を起して、末法行者の實證は愈よ顯然したのである、その序開きは清澄の説法から、立正安國の諫曉に發し、伊豆の流離から終に佐渡の流瀆となつた。

法華經の行者なければ、大菩薩は御すみかおはせざるか但し日本國には日蓮一人ばかりこそ世間出世間正直の者にては候へ……又聖人は言をかざらずと申す、又いまだ顯はれざるを後をしるを聖人と申すか日蓮は聖人の一分にあたり。この法門の故に二十

餘所追はれ結句流罪に及び、身に多くの疵を被り、弟子をあまた殺させたり…若し然らば八幡大菩薩は日蓮が頂をはなれさせ給ひては、いづれの人の頂に住み給はん。

(文永六年、法門可被申之事 御遺文六三三頁)

是れ實に龍口法難の二年前、蒙古の使の來た翌年の言、法華擁護の八幡大菩薩は 日本一の正直者の頭を離れ賜はぬ。三世を知る聖人、兼知未萌の豫言者たる自覺は、今までの艱難に段々練磨を経て來た。聖人と雖も一足飛びの仕事はなく、信も行も着々妙、經信受の大活動と共に進境を示して來たのである。而かも是れ尙緒論、序分である。本論正宗分は次で來るべき順序になつて、又その人の覺悟も愈よその方に進んで來た。「日頃月頃待ち受けた」大難は終に來た。文永八年九月十二日(陽曆十月十七日) 正宗分の幕は龍の口の天火と共に開けた。頭の落ちなかつた本意なさ、氷及の下生死の境を出入して、荒爾として末法行者の多難に一段の深刺を加へた經驗、思へばこれ程の喜びはな

「いよ／＼たのもし」の一句、實に萬鈞の重みである。この大安樂に住して北地に向はれた上人の心中は如何であつたであらう。相模の依智から武州、信州の山又山を越え、川又川を渡つて、東海の濱に生れました上人は、越の國に入つて始めて北海の岸に立たれた。寺泊の岸から青螺一抹の佐渡が島も、今は冬の風に荒れた日本海波濤に漂ふてゐる。

今月十日(陽曆十一月十三日)相州愛京の郡、依智の郷をたつて、…十二日を経て越後の國寺泊の津につさぬ此より大海を亘つて佐渡の國に至らんと欲するに順風定まらず。その期を知らず。道の間の事、心も及ぶべくもなく、筆にも及ばず、但暗に推し度るべし。又本より存知の上なれば、始めて歎き止むべきにあらす。…法華經は三世説法の儀式なり。過去の不輕品は今の勸持品、今の勸持品は過去の不輕品なり。今の勸持品は未來には不輕品となるべし。その時日蓮は即ち不輕菩薩となるべし…當時當世三類の敵人は之れ有るに、但八十萬億那由佗の諸菩

い。身は愈よ釋尊豫言の行者である、法華經の説法は着々此の一人、旃陀羅の子たる日蓮は現はれて來た。自分の肉身は五十年の前に房州の邊に生れたのであるが、自身の過去は遠く生前久遠劫に連なつて、遠く末法弘通の使命に應ずべき身ではないか。

噲警品に云く、見有讀誦書持經者、輕賤憎嫉而懷結恨。法師品に云く、如來現在、猶多怨嫉、況滅度後勸持品に云く、加刀杖乃至數々見擯出。安樂行品に云く、一切世間多怨難信と此等は經文に候へども、何れの世にかゝるべしとも知られず。過去の不輕菩薩、覺徳比丘などこそ、身にあたり讀みみいらせ候ひけると見えはんべれ。現在には正像二千年はさておきぬ、末法に入つては、この日本國には當時は日蓮一人見え候…今日蓮法華經一部よみて候。一句一偈に猶授記を被れり、何況んや一部をや。いよ／＼たのもし。

(文永八年、依智にて、轉重輕受法門 御遺文 六九四頁)

露は、一人も見えたまはずば、乾る潮の満たざるが如し。水を清ませば月を浮べ、木を植ゆれば鳥を棲ましむ。日蓮は八十萬億那由佗の諸菩薩に代官となりて之を申す云々

十月二十二日辰の時 (陽曆十一月廿五日)

(寺泊御書、御遺文六九七—七〇〇頁)

海を渡つて佐渡の島の講居の様は今更云ふに及ばぬ越えて十一月廿三日(陽曆十二月廿六日) 塚原の雪中から富木殿への書状を見よ。二月は寒風頻りに吹いて霜雪更に降らざる時はあれども、日の光りを見見る事なし。八寒を現身に感ず、人の心禽獸に同じく、主師親を知らず、何に況んや佛法の邪正、師の善惡をや、此等は且く之をおく…天台傳教は粗釋し給へども、之を弘め殘せる一大事の秘法を、此國に初めて之を弘む、日蓮豈その人に非ずや…法已に顯はれぬ、前相先代に超過せり。日蓮之を勸ふるに、是れ時の然らしむる故也。經に云く有四導師一名上行云云。

(富木入道殿御返事、御遺文七〇二頁)

此の書狀の發せられた時は、即ち上人が一代の大覺悟愈々明白に益す強く、一代の大述作開目鈔の成案が胸中にあつた時、上人が過去五十年の緒論は全く過ぎ、愈々本論に入り、この現身の遺達、經驗、信念、覺悟、皆茲に北海雪中の靈光に洞然として融合光耀し一生の過去と、生前の過去と、共に久遠無始の過去に連つて、その人格は本有の上行菩薩に結合した時である、先には末法行者の行法を思つて、序品から勸持品等を身讀し來つた上人は、茲に於て自分自らの壽量顯本に到達して、茲に本有の壽量を開顯せられた。その宣言にきけ、

此に日蓮案して云く、世すでに未代に入つて二百餘年、邊土に生をうけ、その上下賤、その上貧道の身なり。……知らず大通結縁の第三類の在世に漏れたるか、久遠五百歳の退轉して今に來るか、法華經を行せし程に世間の累縁、王難、外道の難小乘經の難なんと忍びし程に、權大乘實大乘經を極めた

かされ、波に波をたぐみ、難に難を加へ、非に非をますべし、像法の中には天台一人法華經一切經を讀めり……像の末に傳教一人法華經一切經を佛説の如く讀み給へり……今末法の始二百餘年なり。況滅度後としるしに鬪諍の序となるべきゆへに、非理を前として濁世のしるしに召し合せられずして、流罪乃至壽に及ばんとするなり。されば日蓮が法華經の知解は、天台傳教には千萬が一分も及ぶ事なけれども難を忍び、慈悲すぐれたる事は、恐れをいだしぬべし。定て天の計ひにもあづかるべしと存すれども一分のしるしもなく、いよゝ重科に沈む、還つて此事を計りみれば、我が身の法華經の行者にあらざるか、又諸天善神等の此國をすて、去り給へるか、かたし疑はし、而るに法華經の第五の卷勸持品二十行の偈は、日蓮だにも此國に生まれずば、ほととせと世尊は妄語の人、八十萬億那由佗の菩薩は提婆が虚誑罪にも墮ちぬべし、經に云く、有諸無智人、惡口罵言等、加刀杖瓦石等云云。今の世を見るに、日

るやうなる道緯、善導、法然等が如くなる惡魔の身に入りたる者、法華經を強くほめあげ、機をあながちに下し、理深解微と立て未有一人得者千中無一等とすかし、者に、無量生が閻恒河沙の度びすかされて權經に落ちぬ、權經たり小乘經に落ちぬ外道外典に落ちぬ、結句は惡道に落ちけりと深く此を知れり、日本國に此を知れる者は但日蓮一人なり。これを一言も申し出だすならば、父母兄弟師匠に國主の王難必ず來るべし。いはすば慈悲なきに似たりと思惟するに、日蓮今度強盛の菩提心を起し、退轉せしと願ひしに、既に二十餘年が間、此の法門を申すに、日々月々年々に難かさなる。少々の難は數しらす、大事の難四度なり。二度は暫く措く、王難すでに二度に及ぶ、今度はずでに我身命に及ぶ。その上弟子といひ權那といひ、僅かの聽問の俗人なんと來て重科に行はる、謀叛なんどの者の如し。法華經第四に云く、而此經者、如來現在、猶多怨嫉、況滅度後等云云……在世猶然り、乃至像末邊土をや。山に山を

遣より外の諸僧、たれの人か法華經につけて諸人に惡口罵言せられ、刀杖等を加へらるゝ者ある。日蓮なくば此一偈の未來記は妄語となりぬ。惡世中比丘邪智心詭曲、又云く與白衣說法、爲世所恭敬、如六通羅漢、此等の經文は今の世の念佛者禪宗律宗等の法師なくば、世尊は又大妄語の人、常在大衆中、乃至向國王大臣、波羅門居士等、今の世の僧等、日蓮を譏奏して流罪せずば、此經文むなし、又云く數々見擯出等云云、日蓮法華經のゆへに度々流されずば數々の二字いかにかせん。此の二字は天台傳教も未だ讀み給はず、況んや餘人をや。末法の始のしるし恐怖惡世中の金言のあふゆへに、但日蓮一人これを讀めり。

(文永九年 開目鈔、御遺文七六八七七三頁)

上人の事業の上からいつても佐波在島三年は、實にその一生の正宗分であつて、又同事に一生の結論、流通分の用意は、本尊の開顯に依つて出來上つた。正宗の頂點、流通の開端として、上人が過去生前の開顯と

共に未來使命の叙説として、諸法實相鈔は文永十年五月十七日(陽曆七月三日)に現はれた。

日蓮未法に生まれて、上行菩薩の弘め給ふべき所の妙法を先立ちて粗ひろめつくりあらはし給ふべき本門壽量品の古佛たる釋迦佛迹門寶塔品の時涌出し給ふ多寶佛、涌出品の時出現し給ふ地涌の菩薩を先づ作り顯はし奉る事、予が分齊にはいみじき事なり。……地涌の菩薩のさきがけ日蓮一人也、地涌の菩薩の數にも入りなまし。若し日蓮地涌の菩薩の數に入らば、豈に日蓮が弟子檀那、地涌の流類に非ずや、經に云く、能竊爲一人、說法華經、乃至一句、當知是人、則如來使、如來所遣、行如來事と。豈別人の事を説き給ふならんや。……いかに今度信心を出して法華經の行者にて通り、日蓮が一門となり通し給ふべし。日蓮と同意ならば地涌の菩薩たらんか地涌の菩薩に定まりなば、釋尊久遠の弟子たる事豈に疑んや、經に云く、我自久遠來、教化是等衆とは是なり、未法にして妙法蓮華經を弘めん者は、男女は

運若しや六萬恒沙の地涌の菩薩の眷屬にもやあらん

(文永十年、諸法實相鈔、御遺文九五九—九六

四頁)

「三世各々別あるべからず」の一言は、實に上人が一代の痛切なる經驗身證から來た覺悟であつた。妙經の信仰はその豫言の實行となり、折伏の戦ひ、數々見擯出の實踐、況滅度後のしるしは、その人の過去を久遠地涌の眷屬に連れしめ、その未來の當詣道場、不滅の壽量を確め來つた、當詣道場といひ未來の成佛といつても、只一人他世淨土に往生して、安樂の生を送る謂ひではない。妙經の信仰と實行とに依つて、過去久遠の大生命を自覺した聖人は、又妙經所説のまゝに未法の弘通、衆生の救護に當るは云ふまでもなく、本尊の開顯は已にその用意として佐渡在島の中に出來上がつた、聖人の未來は一にこの一事に注ぎ來るべきは自然の決論である、此の決論は偶然に得て來たものでなく無始久遠來の大使命に基いて居、又單に時間の上での現在未來から來た打算でなくて、實に時間を超越した

嫌ふ可からず、皆地涌の菩薩の出現に非ずんば唱へ難き題目なり……多寶佛は半座を分けて釋迦如來に奉り給ひし時、妙法蓮華經の扉をさし顯はし、釋迦多寶の二佛大將として定め給ひし事、あに儗りなるべきや。併しながら我等衆生を佛になさんとの御談合也。日蓮はその座には住し候はねども、經文を見候に少しもくもりなし。又その座にもやありけん、凡夫なれば過去を知らず、現在は見へて法華經の行者也、又未來は決定として當詣道場なるべし。過去をも是を以つて推するに虚空會にもやありつらん。三世各別あるべからず。此の如く思ひつゝ候へば流人なれども喜悅はかりなし。うれしきにも涙つらさにも涙なり……現在の大家を思ひつゝくるにも涙、未來の成佛を思ふて喜ぶにも涙せさあえず、鳥と蟲とは泣けども涙落ちず、日蓮は泣かねども涙ひまなし。この涙世間の事には非ず、但偏へに法華經の故也。若し然らば甘露の涙とも云つべし。……總じて日蓮が身に當つての法門渡しまるらせ候ぞ。日

實相の妙用から來る。

三世を知るを聖人と云ふ……教主釋尊は、既に近くは去後三月の涅槃之を知り、遠くは後五百歳廣宣流布疑なきものか。若し爾らば近きを以て遠きを推し現を以つて當を知る。如是相乃至本末究竟等是れなり。後五百歳には誰人を以つて法華經の行者とすべしか之を知るべし。

(聖人知三世事、建治元年、御遺文三三七頁)

この未來弘通の大發心は即ち萬年の外未來に及ぶ曠大の慈悲である、日蓮自らが地涌の上首たる覺悟を開發し、來つたと同じく、日蓮を信する者、男女一切の一門をして、又同じく地涌の眷屬たる自覺に到達せしめ、境智二法合して即身成佛せしめる大事業、本化付屬の法門。上人が一期の流通分は即ちこの未來久遠の壽量を開顯するために現はれざるを得ない。

佐渡流罪の救免、殿中の對面等は之を略する、この大聖人は、今や天下の歸向が己れに向はうとし、幕府は利録を與へて國家の新禧を乞ふ様になつた時、驟然

としてその甘言を退け去つた。文永十一年五月十二日(陽曆六月十七日)孤獨飄然鎌倉を去つて甲州の山中に隠れた心中、何の考ふる所があつたか。抑も日蓮は日本國を助けんと深く思へども、日本國の上下萬人、一同國亡ぶべき故にや用ひられざる上、度々怨をなさるれば力及ばず山林に交り候。古來、上人が身延退隱の解釋については、此の文や、三度諫めて去るなどいふ事で、極めて淡泊簡單に見て居る人が多いが、この様な消極主義で末法の毒量品を開顯した聖者の心事を盡し得るなら、それこそ不思議の上の奇怪である。妙經の色讀、一期の身證によつて序品から段々に勸持品乃至は毒量品を開展し、この肉身五十年の生活に過去久遠の大壽命を自覺し體達した聖者の最後は、當に此の如き消極主義、引つ込み思案の隱居に終るべきか、寺泊にあつてすら、過去の不輕品は今の勸持品と自覺した聖者が「於佛滅後、聞如是經、勿生疑惑」の遺誡を何と結着處置しておくべきか。神力品の斯人行世間、能滅衆生闇の自覺に基き、一切祕要之義を滅後に宣示

實現する方法について何等の考ふる所なくして終るならば、日蓮上人は過去の毒量を自覺して、未來無盡の生命を知らない人と云はなければならぬ、過去は上行であれ何であれ、未來は寂滅爲樂の一獨覺たるに過ぎない、然し此の如きは一片の迷ひに過ぎぬ。身延入山後第一の著作報恩鈔は、明白にこの入山の大願を披瀝して居るでないか。今までの佛教史を批判し、自己一期の經歷を叙して、妙經と自己人格との冥合を明かにし三大秘法を開示して後の決論を見よ。

日蓮が慈悲廣大ならば、南無妙法蓮華經は萬年の外、未來までも流るべし。……我滅度後、後五百歲中、廣宣流布、於閻浮提、無令斷絕……此の經文若し空くなるならば……恐くは教主釋尊は無間地獄に墮ち多寶佛は阿鼻の炎にむせび、十方の諸佛は八大地獄を栖とし、一切の菩薩は一百三十六の苦を受くべし

(建治二年七月廿一日、陽曆八月卅一日、御遺文一五〇九—一五一〇頁)

は通世のやうに「見ゆる場合に抱ける大覺悟であつた」「人久しといへども百年には過ぎず、その間の事は但一睡の夢ぞかし」(御遺文一五三〇頁) 然しながら「命は限りある事なり、すこしもをどろくこと勿れ」(御遺文二〇九六頁)。「今の時は、世すでに上行菩薩の御出現の時刻に當れり、然るに余愚眼を以て之を見るに、先相すでに現はれたる歟」(御遺文一五六〇頁)。「日蓮は日本第一の不當の法師、但し法華經を信じ候事は一閻浮提第一の聖人なり、その名は十方の淨土にきこえぬ」(御遺文一七六七頁)。「又涌出品は、日蓮が爲めには少し由ある品なり、その故は上行菩薩等の末法に出現して、南無妙法蓮華經の五字を弘むべしと見えたり。然るに日蓮一人出來す。六萬恒沙の菩薩より定めて忠賞を被るべしと思へば、たのもしき事也」(御遺文一八四三頁)。「傳教大師は、正像稍過ぎ已つて末法太だ近きにあり、法華一乘の機、今正しく是れその時なり」と懺ひさせ給ふ。日蓮は日本第一の貧乏者なれども、佛法を以つて論ずれば、一閻浮提第一の富める者也。

(御遺文一八五六頁)。「日蓮は日月帝釋梵天をかたうととせん、日月天眼を開いて御覽あるべし」。(御遺文一九六九頁)。「今八幡大菩薩は、本地月氏の不安語の法華經を述に、日本國にして正直の二字となして賢人の頂きに宿らんと云々、若し爾らば、此の大菩薩は寶殿をやきて天にのぼり給ふとも、法華經の行者、日本國にあるなれば、其所に栖み給ふべし」(御遺文二〇四〇頁)

此等の所懷言説、是れ皆慈悲廣大の布衲である、又顯本毒量から出て來る自然の結論、末法流通の大願である、此等の所懷自信を縫ふて現はれた在山人餘の大獅子吼には、憂國の至誠、護法の熱誠、亡國の咒咀(此については別に論ずる)、弘法の畫策、參差探燭の光彩は、今本題以外として略するが要するに此間の上人の生活、言説、行動を一貫した覺悟は、「法是れ久成の法なるが故に、久成の人に付す」(御遺文九四三頁二〇五一頁)の一語に盡し得る。尙詳しく云へば未來永遠の大生命を達得した大自信と、その不滅甘露

の法を衆生に頒布する用意とである。弘安四年の佛誕日、卯月八日（陽曆四月廿七日）の文に  
 この三大秘法は二千餘年のそのかみ、地涌千界の上首として、日蓮徳に教主釋尊より口訣相承せし也。今日蓮が所行は、靈鷲の稟承に芥爾ばかりの相違なき色も替はらぬ壽量品の事の三大事也。

（三大秘法稟承事、御遺文二〇五四頁）

此に於て『三世各別あるべからず』の大悟徹は理論でなくて、現身の生命の大事實たる事は宣明せられ。此土即寂光土の思想も單に理想ではない。

この山の體たらく……北は身延山、南は鷹取山、西は七面山、東は天子山也……中天竺之鷲峰山を此處に移せるか、將た漢土の天台山の來れるかと覺ゆ。この四山四河の中に手の廣さ程の平かなる處あり、こゝに庵室を結んで、天雨を脱れ、木の皮をはぎて四壁とし、自死の鹿の皮を衣とし、春は葎を折りて身を養ひ、秋は果を拾ひて命を支へ候ひつる程に、去年（弘安二年）十一月より雪降り積みて、改年の正

月今に絶ゆる事なし。庵室は七尺、雪は一丈、四壁は米を壁とし、野のづらゝは道場莊嚴の瓔珞の玉に似たり内には雪を米と積む。

（弘安三年、筒御器鈔、御遺文一九三九頁）

（建治元年、身延山御書、御遺文一二九七頁以下）

参照（弘安二年、松野殿女房御返事、御遺文一八五八頁）

（弘安四年、南條殿御返事、御遺文二〇六九頁、八頁）

（弘安四年、前掲）

此の如くにして、上人の一期六十年は、實にこの現世の一時に三世を收め、多難迫害の中に過去の宿命を悟り、現身の修行に未來萬年の基本を開顯し來つた。生死の二字は茲に於て偶事でない。釋尊最後の靈山八年にも當る在山の八年も、四ヶ月を超過した。弘安五年九月八日（陽曆十月十一日）の栗毛の馬に跨つて山を出で、道の程別事もなく、靈山の良ともいふべき池上の郷、田波の川邊に着かれた。月を越えて十三日（陽

曆十一月十四日）午前八時、この聖者が色身の一期は終つた。前後六十年、二萬二千一百四十三日と二十時間間の生命は、無量百千萬億載阿僧祇劫の過去未來に對しては、實に『一睡の夢』である。然しこの束の間の一期には、無限の三世を包容する大生命が現はれ、この生命は即ち三世貫通の妙法の色識となり、一部二十八品の實證となつたのである。生死の二つも此の如くにしてこそ、始めて意味があること云ふ可きではないか。

『不知生、焉知死』とは誠に明言である。それと同じ時に死を知らないものは、又生をも知る事は出来ない

而して死を知ると云ふのは、單に死を怖れる事ではなく死後の覺悟は生前の顯本と相伴ひ、久遠の過去と永劫の未來とは一つにこの現在の一刹那毎に攝容し盡されるのである。  
 最後に尙一つ、赤白二滯を混じて成つた旃阿羅の子日蓮の自覺と、その身を生れた父母に對し、又自分の事業の將來についての信念とを表はすべき一文を記して、この一篇を結ぶ。

日蓮は日本第一の法華經の行者なり。すでに難持品の二十行の偈の文は、日本國の中には日蓮一人よめり、八十萬億那由陀の菩薩は、口には宣べたれども修行したる人一人もなし。不思議の日蓮を生み出せし父母は、日本國の一切衆生の中には大果報の人も父母となり其子となるも必ず宿習なり。若し日蓮が法華經釋迦如來の御使ならば、父母豈に其故なからんや……釋迦多寶の二佛日蓮が父母と變じ給ふか。然らずんば八十萬億の菩薩の生まれかわり給ふ歟。又上行菩薩等四菩薩の中の垂迹歟、不思議に覺え候……日蓮となれる事、自解佛乘とも云つべし……經に云く、如日月光明、能除諸幽冥、斯人行世間、能滅衆生闇と、此文の心よく案じさせ給へ。斯人行世間の五の文字は上行菩薩末法の始の五百年に出現して、南無妙法蓮華經の五字の光明をさし出たして、無明煩惱の闇をてらすべしと云ふ事なり。日蓮等此の上行菩薩の御使として、日本國の一切衆生に法華經をうけたもてと勤めしは是なり、此山にしても怠らず候也。

（弘安三年、寂日房御書、御遺文一八七二頁）

### 維摩經の異彩

(天晴會例會講演) 噴堂 加藤熊一郎君

予は未だ曾つて天晴會に出席しなかつたのですが曩きに本多師よりは是非出席せよと仰せられたので本日始めて顔を出した次第であります。

實は門外漢の觀たる日蓮聖人と題して演べる考へで聖人の遺文や木下君の日蓮論、足立君の日蓮論、高橋五郎君の日蓮論等の諸書も繕いて見たが日蓮聖人を論ずることは容易でない、未だ研究の日淺く批評眼に乏しき所から尙之れは研究の後を期し、此に維摩經に就て聊か述べて見ようと思ふ。

凡そ維摩、法華、勝曼の三經は日本佛教の中心として聖徳太子が曾て講せられしこともあり、支那に於ては天台、荆溪等の註釋を加へたものもあり、而も大乘甚深の意義を説ける、其關係法華經とは密接なるものあるに依り今斯かる題を選んだ次第である、されど未だ多くの經典を讀んだものでないから、殊に一經

此經に於て既に佛教の自由討究の思想が早く二千年前に現はれたることを見るのである。

此經述作の年代に就ては、學者間に種々議論があることであるが、佛滅後四百年といふのが普通の説である、要するに佛教一部の眞理に偏執する小乘固陋の見を看破して釋尊の本懐を明かにし、大乘佛教興隆の先驅たるものである事は疑ふべからざるものと信するのである。

此經は支那に於ては随分讀まれたもので、朱子の如き、其語録を見るに支那人の述作せる經典があるが此經は其一であらうと言つて居る、然しお氣の毒などに獨逸の梵語學者が其原本を持つて居るといふ事であれば其誤れるや明かである、又足利時代に(?)義道の維摩經があるが支那人は之をも我中華の人の作ならん

と謂つて居る、兎に角、文學として見ても確かに一異彩を放てるものと稱せられ、支那の文學者に非常に愛讀せられたもので、王維字は摩詰と、自ら其名を以て自己に命名せし詩人をも出して居る、儒者も亦此經に

一論を取つて其異彩を示すことは出来ないものであるが子の乏しき經驗と、古來此經に對する註釋家の議論によるも、維摩經は大藏經五千餘卷の中、確かに異彩あるものゝ一たるや疑ふを要せぬ、多くの經典に殆んど其全部が、佛菩薩の説なるに反し、此經が白衣の一居士たる維摩詰の所説たるに於て一異彩を放てるは言ふ迄もなく、殊に此一居士が傍若無人の言論を以て佛弟子並に菩薩を論詰して、別に同じき大乘甚深の意見を保持せるに於て自由討究の新思想が、髮髻として一經の中に現はるゝは、他經に於て多く見得べからざるものではなからうか。

佛教を以て佛の專有とし、其教義を以て佛弟子の專有とし、其教權に無限の威力を有せりと爲す舊思想に反對し、佛弟子以外にあり釋尊と何等交渉なき一居士維摩が而も佛教に通じ、殆んど釋尊と同一なる思想を以て其弟子等の迷教を打破し、却つて佛教の實義を光顯し宣傳したるの一事は、確かに眞理は一方に偏在するものにあらざることを顯示するものと思ふ、吾人は

依つて佛典を味ふもの多く、宋の張天覺の如きは其一人である、彼は或時兀に向つて頻りに何か書いて居る妻が之を見て貴郎は何をお書きになつて居ますかと尋ねた所が、彼は答へて無佛論を著はさんといふ、妻詰問して曰ふに佛無しとせば何ぞ論するの必要あらん無佛を論せんと思へば先づ須く有佛を研究すべしと、此に於てか彼は佛典を繕き、維摩經を讀むに及んで大に得る所ありて、益々佛教を味ふに至つたといふことである

尙此經の一異彩として見るべきは、一經の脚色、悉く戯曲的にして、若し斯道の名手を藉りて潤色し祖述するならば、今日と雖も一種の理想劇たらしむるに充分の價值あるものと思ふ、即ち一曲三場、初めの菴夢樹園説法場に於て、寶積長者の子五百の長者と共に手に手に、七寶の天蓋を手にして上場するに初り佛國淨土の説法となり、舍利弗と螺髻梵主との問答となり、更に維摩詰の問疾となつて佛の十大弟子並に菩薩方に對する使者の任命に入り文殊の承諾となつて、



場面一轉、第二場維摩方丈の室となり、こゝに本劇の主人公、維摩詰、空室に一臥床を置きて其上にあり、副主人公、文殊師利、佛勅を奉じて數萬の菩薩、佛弟子と共に悠々として此に來りて問疾の問答となり、兩々相對して談はいよゝ進み、傍ら須彌臺の不思議となり天女と舍利弗との問答となりて、波瀾曲折、終に議は不二法門に入りて、三十二の菩薩、各々見解を述べ、最後に文殊の無言無說、無示無識といふに對し、維摩默然として語なく、腹藝を示して場面は先の菴羅樹園に返り、こゝへ文殊と維摩とは手を携へて上場し、佛の御前に於て維摩は其身の上を語りて曲を結ぶ、其間諸種の不思議を點綴して、場面の變化殊に多く、且つ其鳩摩羅什の翻譯は、文簡にして意深く、句々流暢にして節々妙致を盡す、此文も亦確かに漢譯經典中の異彩である、

斯くの如くにして此經には實に趣味あり真理ある甚深の意義を示せるものであつて、又佛法の真理に至る所に羅々堂々として存することを説いて居るものと思

ふ、然れども不二の法門に至りては最後法華經に至らざれば明かにならないが、此不二を説ける點に於ても法華經と關係するより天台も此經を釋し、聖德太子亦併せ用ゐた所以である、予は後日日蓮聖人の研究を吐露し、進んで法華經を研究し四五年後は其得たる所を發表せんことを期する次第である、(完)

故高山博士云く

日蓮は予の知れる日本人中の最大の偉人也、予は和氣清磨楠正成乃至豊臣秀吉を生じたる日本を左迄大なりとは思はされども日蓮を生じたる國土は實に生れ甲斐のある國土なることを思ふ、吾人の祖先の中に日蓮の如き人物を有することは吾人が世界萬邦に誇稱すべき所也 (楞牛全集四卷九六〇頁)

# 報道

## ○東京教信

◎大聖日蓮蓮誕會 三月十六日六團體の主體にて各會員並に新聞雜誌社へ案内狀を發し委員は前日來り廣告會場の準備整頓に遺憾なきを期し會場には經木モルを縱横に交叉したる外に萬國旗を飾り頗るハイカラ式莊嚴の美を盡し特に會場味の間には聖祖の尊影を安置し奉りて鏡餅神酒を供へ前面一面は吉田幹事の意匠に鏡餅乾物菜羹三十餘種を用ひて巧みに房州小湊の實際的風光大觀を偲びしむるものあり少しく之を記せば昆布もて山を築きたる旭ヶ森は何と云う雄大な自然の美觀を表はしユバにて作れる重忠夫妻の小さき樓家と其中に在りて呱呱の産聲を擧げつゝある聖人の御尊體を拜せしむるなどに工夫を凝らしたるものなり又前面に一流の河川あり午旁にて堤防を築き流急なる川の中に人參の十字架や海苔製の論語や豌豆の念佛珠數などか流れ行くさまを現はし大聖日蓮の降誕によりて各宗教諸種の道徳觀は其曙光を失ふの意味を諷刺し而して一面には瀾浮統一の大業と其真義は建長五年旭ヶ森の絶頂に於ける堂々たる大宣言によりて發揮せられたるを暗示し額面には野口簡正の筆に成れる天晴地明の大文字を掲げ更に大本堂の寶前には鏡餅菓物香華燈明を供へ造花の蓮華の中央より赤

白の布を引きて光明射射の意義を示し其裝飾の凡ては皆深き意味を含ませしめて工夫を凝らしたるがため集れるものは何れも變美微妙の感に打たれたるものばかりしを見受けたりき午前十一時一發鐘の鳴るや本多大僧正は僧員十數名を率へて森嚴なる法式を敷け報恩謝徳の妙味を擧げ吉田幹護士は各國醫員代表者として左の發願文を奉讀せり

南無本門常住之一切三寶、護法列位之諸天善神、來臨影響知見照覽  
維時明治四十四年三月十六日推歴二月十六日妙興研究會諸妙會第一義會妙教總人會日蓮主義青年會顯本協會之六團體協同し志しく本化別頭の大法筵を設け五種の妙行を修し日本國の魂一切衆生の師父末法の大導師本化上行再身日蓮大聖人の降誕會を舉行し以て報恩謝徳の萬分に擬し奉る  
大聖人之曰く我れ日本の柱とならん我れ日本の眼目とならん我れ日本の大船とならんと聖語簡にして能く大聖人一代の大主張大抱負等を説明し餘蘊なき不省等亦何をか之に加へんや願はばくばく大聖人慈悲の加被力を以て願に助け冥に護り内に御門下各教團の合同統一を一日も迷ひならしめ異體同心の實を擧げ外には正法興隆邪法廢滅し皇道長く昌へ佛日益々輝き一天四海皆歸妙法の洪業を成就せしめ給へと云爾聊か發願の旨趣如件南無妙法蓮華經

右委員總代 本化優婆塞 吉田珍雄教白  
各會員の燒香ありて法式を終り會員一同に折

法華當と菓子を供し少時休憩の後午後一時講演を開けり  
大聖日蓮の降誕 辯護士 松本郡太郎君  
日本國民と日蓮 僧 正野口日主師  
日蓮聖人學生の主義 大僧正 本多日生現下  
各講師の熱烈なる信念と雄大な抱負の突發する所何れも聽衆の肺腑を衝き健全なる信仰を把るべきかを警者努力せしむるものあり松本辯護士は例の壯麗快活の辯辭を振ふて聖人六十年間の奮闘活潑の身體法華の歴史を捉へ來りて其示同凡夫と本化的との二方面に分て堂々偉大なる聖人の洪徳を稱揚し聖人の降誕によりて日本帝國に深き意義を有する國籍の發揮を見るを得るに到れる所以を論明し野口簡正は日蓮と日本國家とは深き因縁關係の存する所以を説き本多大僧正は宗教は國家人生を益し向上せしむる根本要義あるべきものなりとの前提を爲し而して聖人三十年間の心血を盡きたる大主張は立正安國の大義にして是れ則ち大德教の根柢に築き上げられたる學生の主義なり聖人の佛法は王法に合し王法佛法に冥して調和統一せられ爰に始めて立正安國の實現を招き廣宣流布の國體顯現を觀るを得べきものなりと各方面より縱横無盡に論述せられ聽衆は何れも聖人學生の主義は那點に存するを諒得し無限の實感と洪大なる法雨に潤ふたるを歡喜し法悅の裡に散會したるは午後五時なりき委員會者百五十餘名矢野大審院檢事同夫人松原砲兵大佐赤尾辯護士其他知名の紳士夫人及び二六萬朝讀實中外各新聞記者を始めとして軍人後援會幹事等の來會ありて

頗る盛會を極め宗教的會合として他に見るを得ざる莊重端正なる奥床しき正に模範的と稱するに足るべき。

◎國明會發會式 三月二十五日淺草吉野町常福寺に於て金版義昌三上義衛兩氏發起となり日蓮主義の大進教に依りて團體の精華を集明開後するの意義より日野口信正大導師として其發會式を擧げたり當日日野口信正大導師として醒園の法味を擧げ日野口信正の祈願を爲し式後三上義衛師團會の辭を述べ日野口信正は藝術と佛教と云へる標題にて藝術は悉く佛教の意味より現れたるものなりとて淨瑠璃の起原を説き佛教所説の廣大なる深義を暗示して藝術と佛教との關係を知らしめ本多大僧正は人間處世の心得に就て凡そ人々には種々の希望があるが如何にすれば其等を充たす事が出来やうか又人間が世の中に暮して行く上に何等かの光りや願ひを種々種々行かんければならぬが如何にすればそれが出来やうかとの質問を置き世間の慾望は得たときには喜ばしいが失ふ時には非常に苦しい又順境の時には樂い

が逆境の場合には大に悲しいものである然るに宗教の信仰は全く之と趣きを異にして如何なる時にも全分の満足を得亦大に慰安を與ふるものであるこの果敢なき亡ぶべき我れに執して永久不滅の我を認めざれば決して完全の満足は得られない永久不滅の我の實在の基礎の上に立ち躓はしい信仰の妙味に浴せんければ人として價値の甚だ少ないものであると論じ來りて更に徳を顯はすことに關し宗教信仰の生活に入りて始めて實世界に善良の行爲

二日五條上行寺に開く 處世の覺悟 高貫 慎一 信仰の意義 川崎 英照 十五日千本壽壽寺に開會 活ける佛教 高貫 慎一 金光 孝順 信仰の力 銀井 乾升 十八日本山妙滿寺に例會を開く 宗教の二方面 高貫 慎一 斷疑生信 銀井 乾升 日蓮主義の一端 川崎 英照 心に明鏡を用いよ 金光 孝順 彼岸初日教 田上 日篤 同中日 金光 孝順 同給日 三好 信造 廿三日久遠寺に開く 開會の辭 高貫 慎一 人世の大事 銀井 乾升 人と信仰 金光 孝順 佛教の特色 高貫 慎一 每回求道聽法者の集まるもの多く居士は何れも熱心に講説を爲し因循なる京都人士にも無限の靈感を與へて日蓮主義の貴とを知らしむるものありたりき

◎第十例會 三月十一日午後七時大阪ホテルに開會會衆十六名晚餐後左の講話あり 上人の國家觀(其一) 梶木 日種氏 聖念の統一 (新會員)長谷川六合氏 聖祖門下に對する感謝 清水 英吉氏

◎大阪天晴會 三月十一日午後七時大阪ホテルに開會會衆十六名晚餐後左の講話あり 上人の國家觀(其一) 梶木 日種氏 聖念の統一 (新會員)長谷川六合氏 聖祖門下に對する感謝 清水 英吉氏

◎第十例會 三月十一日午後七時大阪ホテルに開會會衆十六名晚餐後左の講話あり 上人の國家觀(其一) 梶木 日種氏 聖念の統一 (新會員)長谷川六合氏 聖祖門下に對する感謝 清水 英吉氏

◎第十例會 三月十一日午後七時大阪ホテルに開會會衆十六名晚餐後左の講話あり 上人の國家觀(其一) 梶木 日種氏 聖念の統一 (新會員)長谷川六合氏 聖祖門下に對する感謝 清水 英吉氏

◎第十例會 三月十一日午後七時大阪ホテルに開會會衆十六名晚餐後左の講話あり 上人の國家觀(其一) 梶木 日種氏 聖念の統一 (新會員)長谷川六合氏 聖祖門下に對する感謝 清水 英吉氏

を爲し誠を養ふて完全なる人格を磨き上ぐるを得べき所以を滔々一時同坐に亙りて懇説せられたり此日會するもの少數なりしも未開の高貴を拜禮して歡喜の感に打たれ日蓮主義の尊きを解し過去に於ける信仰の誤れを懺悔したる此日青森市の青年篤信家中村謙藏君の洋服裝にて讀經唱題の修行を爲したるは一般聽衆に多大の感動を與ふるものありたりき尙ほ同會に毎月第二日曜に例會講演を開き日蓮主義の宣傳に努むべしと云ふ。

◎第一義會 例會講演を四月二日に開く時恰かも陽春踏蕩の候上野の吉野櫻聖地十里の八重櫻芬々として其散佈の香を放つて滿都の士女は爲めに酔はんとす斯かる季節に於て講演會を開くは如何ならんと思ひしも堅實なる信仰の生活に入りし我會員は定刻前より參集するもの多く午後一時山根僧正の導師にて法要を嚴修したる後。

◎千葉縣向風會は常に東京より名士を招聘して講演會を開き社會風教の改善を圖りつゝあるが時代の潮流に鑑みる所ありて綱領第二條の不朽の大道を發揮すべく特に本多大僧正の講演を仰ぐこととし三月二十六日長生都賀堂

◎臨時協議會 三月二十八日午後七時東區雨久寶寺町四丁目船山樓に開會會衆役員十一名當日は本會設立一週紀念大講演會開會の件に就き幹部役員の總會にして左の件々協定せり 一、紀念大講演會は四月十六日(日曜)午後一時中之島公會堂にて開會の事 二、大會專務委員は日野友七、福井秀吉の二人に托する事 三、講師は、本多大僧正、松本辯護士、野添代議士、外に伊豆少將、京大の内藤上田兩博士の内藤に大阪にて某氏等に交渉の事 其他設備等に就て協定する所あり又會費は幹部に於て負擔することに決し各自出資額を印決し會食款談和氣調々の裡に散會時に十時

◎二月十三日吉田町蓮華寺に於て顯誠會主催修養講話會を開き聽衆堂内に充ちたり殊に警察署長田村房吉氏は禮喜飛入演説を爲し本會の爲め盡力せらるゝを謝し左の演題の下に講演を爲せり。

◎廣島教信 開會の辭 御製の聖旨 高田龍視學 小早川新一君 日蓮主義と町則の意義 安田 台城師

◎廣島教信 開會の辭 御製の聖旨 高田龍視學 小早川新一君 日蓮主義と町則の意義 安田 台城師

村小學校に二十七日本納町高等小學校に於て開會し本多大僧正は國土と云へる卓抜なる講題を掲げて國土の本領より説き起して國土の色彩を論明しさらに時代弊風を慨視して救済治療の良法を講し最後に日蓮主義の大進教に因りて國家と民生の利福向上を期すべきなりと結論せられたるが其熱誠莊重の長舌は三百有餘の聽講者をして深き印象を與へ一種の靈感に活かしむるありたりき。

◎京都教報 吾等は豐榮支部の白井氏茂原支部の林氏本納支部の飯高石渡白鳥氏の盡力を感謝するものも唯だ憐れむらくは一般宗教徒に於て尙風事業を輕視するの傾向あるが如し是れ大なる理想にして尙風會の事業は堂々純平たる社會教育也國民教導の羅針盤也須らく自己の天職に奮みて斯の事業發展のために努力せらるゝを望む。

◎京都天晴會 二月十六日妙滿寺に例會を開く突然の例會なりし故會員出席數なく横濱博士外十餘名なりし野老妙滿寺長法の法華經講義の序説一時間餘の講演あり終つて講事數件の内本年の大講習會は秋季に開催する事に決定せり。

◎聖祖門下同志會 三月の例會を伏見泉經寺に開く又本月より毎月十二日門下の碩學河合日辰僧正に觀心本拿抄深奥の講義を聴く事とし三月は本山妙滿寺に來聽するもの二十餘名に及びたり。

◎岡山の教況 本多大僧正現下には、本月二日より播州姫路市に開會せし顯本法華宗西郡講習會の講演を掛け、岡山市に於ける本宗權徒の請應に應じ、隨員日野口日主、關田養叔、石川顯隆と共に同市山崎町本行寺に於て三月二十九、三十、三十一の三日間、毎夕十時より大演説會を開きたり。

◎岡山の教況 本多大僧正現下には、本月二日より播州姫路市に開會せし顯本法華宗西郡講習會の講演を掛け、岡山市に於ける本宗權徒の請應に應じ、隨員日野口日主、關田養叔、石川顯隆と共に同市山崎町本行寺に於て三月二十九、三十、三十一の三日間、毎夕十時より大演説會を開きたり。

◎岡山の教況 本多大僧正現下には、本月二日より播州姫路市に開會せし顯本法華宗西郡講習會の講演を掛け、岡山市に於ける本宗權徒の請應に應じ、隨員日野口日主、關田養叔、石川顯隆と共に同市山崎町本行寺に於て三月二十九、三十、三十一の三日間、毎夕十時より大演説會を開きたり。



金十一圓 住職河野見中 四圓 木島茂雄  
 二圓宛 山崎伊助 川崎久五郎 石倉定吉  
 高吉加平二 一圓 高吉佐一郎 六十錢 木  
 島繁三郎 高吉介之助 五十錢 小野米吉  
 四十錢宛 高橋五郎 加藤茂吉 木島勇吉  
 二圓四十錢 安藤長松外十三名(第二回)

◎同縣內田本傳寺々檀

金二十圓 住職栗原日蓮 二圓 秋田彌三郎  
 (一三)一圓六十錢 常澄瀨右衛門 一圓十  
 錢 小出平兵衛 一圓宛 泉水治左衛門 清  
 田林次郎 小宮佐郎 三橋傳次郎 八十錢  
 本吉源四郎 常澄傳次郎 六十錢宛 土橋久  
 治 同妻次郎 五十錢 宮代忠吉 四十錢宛  
 三橋儀重郎 丸山寅吉 八圓四十五錢 常澄  
 忠平外五十二名合計(第三、四回)

◎同縣別所東光寺々檀

金六圓宛 住職水野乾誠 大和久忠作 四圓  
 風月仁平 二圓 高山磯吉 一圓宛 高山吉  
 太郎 風月乃小 十錢 道原德太郎(第一回)

◎同縣生實本滿寺檀家

四圓八十錢宛 森田庄太郎 森隆三 今井喜  
 一郎 四圓宛 森田七藏 森文太郎 今井喜  
 代太 三圓三十五錢 森崎七藏郎 三圓二十  
 錢 森田佐七郎 二圓八十錢 宇野澤半七  
 一圓五十錢 鑄木三代吉 一圓四十錢宛 鑄  
 木喜三郎 鑄崎幸福 內山忠太郎 角田市右  
 衛門 鑄崎長吉 吹野由太郎 一圓二十錢  
 森田儀一 一圓宛 三枝重郎 同八十次 八  
 十錢宛 鈴木龜藏 森由太郎 今井七太郎  
 同八十次 今井七太郎 同八十次 今井七太郎

會津妙法寺本堂再建寄附金領收報告

(第六回)

金五圓也	第三回	加藤	光英
金壹圓六拾五錢	第二回	稻川	日方
金四拾五錢	第二回	稻子	曜坊
金壹圓四拾錢	第二回	常藤	坊
金參圓參拾七錢五厘	第二回	三須	教英
金六圓七拾五錢	第一、二回	大川	日教
金貳圓參拾錢	第三回	宇津木	支英
金五圓參拾錢	第三回	白鳥	開安
金七拾五錢	第三回	竹內	編殿
金貳拾五錢	第三回	藥王	寺
金拾壹圓參拾錢	第二、三回	法光	寺
金貳拾五錢	第二回	栗原	日蓮
金六圓參拾錢	第二回	井上	日沖
金貳拾五錢	第二回	勳成	寺
金貳拾五錢	第二回	善立	寺
金貳拾五錢	第二回	泰行	寺
金貳拾五錢	第二回	法光	寺
金貳拾五錢	第二回	龍泉	寺
金壹圓也	第二、三回	實相	寺
金壹圓參拾五錢	第三回	大津	賢淳
金八拾五錢	第三回	吉富	叙叔
金參圓參拾錢	第一、二回	東光	寺
金貳圓四拾錢	第一、二回	榮雲	寺
金七拾五錢	第一、二回	妙圓	寺
金拾七錢	第一回	妙興	寺

金拾圓也	第三回	山本	日重
金四圓也	第一、二回	成島	奉行
金貳圓四拾錢	皆納	角田	即是
金八圓也	第一、二回	齋藤	自正
金壹圓也	第一、二回	佐藤	體雅
金拾壹圓貳拾錢	第一、二回皆納	法照	寺
金四圓也	第一、二回	法照	寺
金拾圓六拾錢	皆納	大原	寺
金貳圓也	第一回	廣慶	寺
金貳圓也	第一回	橫山	賢明
金貳圓也	第一回	山田	真運
金貳圓也	第一、二回	法雲	寺
金貳圓也	第一回	土屋	真容
金貳圓也	第一回	勝山	義道
金貳圓也	第一回	金坂	學信
金拾五圓也	第三回	西村	會立
金拾五圓也	第三回	日比野	日蓮
金貳圓也	第二回	渡邊	支雅
金五圓也	第二回	草切	榮玉
金七圓五拾錢	第二回	石井	寬俊
金拾五圓也	第一回	松井	道安
金參圓也	第四回	本屋	寺
金參圓也	第一回	佐野	日蓮
金壹圓四拾錢	第一回	小澤	圓壽
金壹圓五拾錢	第一回皆納	秋葉	義隆
金壹圓五拾錢	第二回皆納	常運	寺
金拾圓也	第二回	法道	寺
金八圓六拾錢	第二回皆納	白井	日昇
		鏡織	日航

金壹圓五拾錢	第二回同	今井	真惠
金七拾錢	第一回	今井	真惠
金貳圓四拾錢	皆納	北田	玄道
金壹圓四拾錢	同	同	同
金壹圓五拾錢	第一回	山本	博淵
金五圓參拾錢	第一回	堀江	誠一
金貳圓四拾錢	第一回	大塚	義有
金貳圓四拾錢	第一回皆納	石上	義俊
金參圓也	第一回	國吉	貞辨
金參圓也	第一回皆納	山本	博淵
金拾七錢	第一回	中村	通寬
金拾七錢	同	同	同
金壹圓五拾錢	第一回	加藤	開照
金貳拾五錢	第一回	菅田	聖道
金貳拾五錢	皆納	猪野	日隆
金貳拾五錢	皆納	古谷	真立
金貳拾五錢	第一回	原田	容廣
金拾圓也	第一回	山本	通辨
金拾圓也	第一回	高田	日暢
以	第二回	飯倉	日和



宮田新兵衛 森川運助 大津橋豆三 鑿川鈴  
 太郎 岡本治昇 渡邊留次郎 鬼頭文助 佐藤条  
 次郎 三圓宛 森村つば外十六名合計(第四回)

◎同縣同市雲山寺檀家

金三圓宛 大矢彦右衛門 頭田ゆき 二圓  
 奧村音彦 一圓宛 櫻井武雄 大橋梅吉 北  
 村うな 細川洋藏 六十錢 下村京次郎  
 (第五回、完納)

◎同縣同市妙行寺檀家

二圓宛 永田領太郎 池田重治 一圓宛 岩  
 間敏雄 池田重三(第五回、完納)

◎同縣同市法道寺々檀

金一圓 法道寺 八十錢 清水市太郎外四名  
 金二圓 白井伊藏 一圓五十錢宛 加藤十  
 郎 白井米藏 一圓宛 住職前田龜登 根木  
 重次郎 五十錢宛 加藤善彌 八木長作 福  
 井増藏 四十錢 田中吉平 八圓七十七錢  
 渡邊佐助外五十七名(第五回、完納)

◎同縣田原町當行寺々檀

金十五圓 住職石塚日塚 一圓宛 豐田六平  
 石田淳吉 豐田善九郎 四十錢宛 豐田權平  
 同儀一圓 同儀平 同點藏 石田周藏  
 本目源藏 杉浦喜太郎 三十錢 豐田くく 四  
 圓七十六錢 石田善平外十三名(第五回、完納)

◎同縣太田妙安寺々檀

金三十圓 常徳寺 二圓 渡邊梅三郎 一圓  
 宛 富木庄兵衛 小澤正直 市野善長 太田  
 治三郎 櫻橋増吉 小野甚九郎 宮部谷次郎  
 田内乙次郎 六十錢宛 若林寛三郎 安藤  
 秀次郎 小阪井新藏 渡井ちた 柳原藤也  
 五十錢 小野甚九郎 同八十次 柳原藤也  
 五十錢 小野甚九郎 同八十次 柳原藤也

◎愛知縣名古屋常徳寺々檀

金拾圓也 第三回 山本 日重  
 金四圓也 第一、二回 成島 奉行  
 金貳圓四拾錢 皆納 角田 即是  
 金八圓也 第一、二回 齋藤 自正  
 金壹圓也 第一、二回 佐藤 體雅  
 金拾壹圓貳拾錢 第一、二回皆納 法照 寺  
 金四圓也 第一、二回 法照 寺  
 金拾圓六拾錢 皆納 大原 寺  
 金貳圓也 第一回 廣慶 寺  
 金貳圓也 第一回 橫山 賢明  
 金貳圓也 第一回 山田 真運  
 金貳圓也 第一、二回 法雲 寺  
 金貳圓也 第一回 土屋 真容  
 金貳圓也 第一回 勝山 義道  
 金貳圓也 第一回 金坂 學信  
 金拾五圓也 第三回 西村 會立  
 金拾五圓也 第三回 日比野 日蓮  
 金貳圓也 第二回 渡邊 支雅  
 金五圓也 第二回 草切 榮玉  
 金七圓五拾錢 第二回 石井 寬俊  
 金拾五圓也 第一回 松井 道安  
 金參圓也 第四回 本屋 寺  
 金參圓也 第一回 佐野 日蓮  
 金壹圓四拾錢 第一回 小澤 圓壽  
 金壹圓五拾錢 第一回皆納 秋葉 義隆  
 金壹圓五拾錢 第二回皆納 常運 寺  
 金拾圓也 第二回 法道 寺  
 金八圓六拾錢 第二回皆納 白井 日昇  
 鏡織 日航

大僧正本多日生現下講述

# 法華經講演集

序 如來壽量品

洋裝 美金五拾錢  
正價 金五拾錢  
郵税 一部金四錢三部迄金八錢

抑も宗教學上の根本問題は何であるか、即ち宇宙觀と人身觀と超人觀の三種である、故に、宇宙の成立と其實相、吾人の本體と其向上、超人の本體と其力用とに關する、圓滿なる解釋と完全なる知識を得ることが出来ないならば、即ち人生及び自己生存の意義が解らぬので、夢中の生涯と謂はねばならぬ、されば斯の重要問題に就ては、多くの宗教學者が探究研討して居るのであるが、未だ何れも適當なる結論を見出さない、若夫完全にして適切な解釋を示せるものがあるならば、直ちに進で研鑽すべきことである、即ちそれは一切宗教中、大聖佛陀の説き給ひし法華經に於て光顯せられて居る、法華經の實相觀は、即ち宇宙觀にして萬有の本體活動等を論明し、人開會は人身觀にして、吾人の本體と其向上の状態を説明し、佛陀の顯本は超人觀の妙致を論明し、人開會は人身觀にして、吾人の本體を圓滿に説かれてある、而して法華經中如來壽量品には、極めて明確適切なる解釋を示されて居る、本書は大僧正本多日生現下、畢生の熱誠と卓越の識見とを以て御講述になられたのである、故に一たびと向上とを遂ぐるであらう。

四月八日發行

第一版に限り金五拾錢を以て特賣す

發行所

東京市淺草區北清島町十四番地

統

(振替口座東京一二一九)

團

## 宮殿●須彌段

## 前机●幢幡

## 大取●賣

御來店の飾は陳列場へ御來車被下度是れ迄とは一層勉強仕一切各宗の佛具陳列仕置候

### 正價 三法堂佛具發賣目錄

小包帳例附(郵券四錢)

### 注意

佛具と唱すれす、此の種類數品之候を以て一記載する能はす、依て特に佛具正價目録書を製作致候に付御入用の御覽は、郵券四錢御送附致候下候は、迅速送呈仕候、此の目錄を御覽あれ、寺院様方の御入用品一切の買物何程遠方でも坐なから買物安價にて可升、早く取らせ御覽あれ其の正價附の品は左の通り

佛具一具切、過去帳の類、大般若經、一切藏經、理趣分、位牌、太鼓、佛具金物、一切釣鐘、半鐘、木魚、拂子、曲鉢、香珠、數珠、大念、三寶、寶蓋、佛龕、木像、樹子、和幡、唐幡、人天蓋、樂器類、鹿、寶物、高麗、製衣、文庫、盤具、講帳、線香、香具類、正價附にして御買物坐なから自由自在

### 佛具卸部

京都市三條 本舖 三法堂藤田總次  
通小橋西入

### 小賣部

特電話二千七百八拾三番 振替貯 大阪 四二五九  
通大橋西入 三法堂佛具陳列場 東京 三〇七



## 勤行作法

勤請文、助行證書(方便品十如是自我偽)正行唱題  
同向文、受持文、〇自我偽唱題

右は各派統一の理想の下に、本多日生師の編纂せられたるものにして、勸請文、同向文の如き最も簡潔にして而も其要義を逸せず總振假名付なれば初心の行者の所用として最も適切なるもの也、客月來願與の求めに應ずるを得ざりしも今回さらに印刷に付し製本出來致し一般信徒の爲めに之を頒たんとす、御入用の方は前記代金を添へて御申込あらば御送可致候也。

### 發行所

東京市淺草區北清島町十四番地  
妙教婦人會

明治四十四年四月十五日印刷發行

發行人 井村日成 編輯人 山根日東 印刷人 鈴木日雄

## 發行所

## 統

## 團

東京市淺草區北清島町十四番地

# 統一

第百九十五號

御國體に就て



海軍大佐 佐藤鐵太郎君

日蓮上人畢生の主張

大僧正 本多日生師